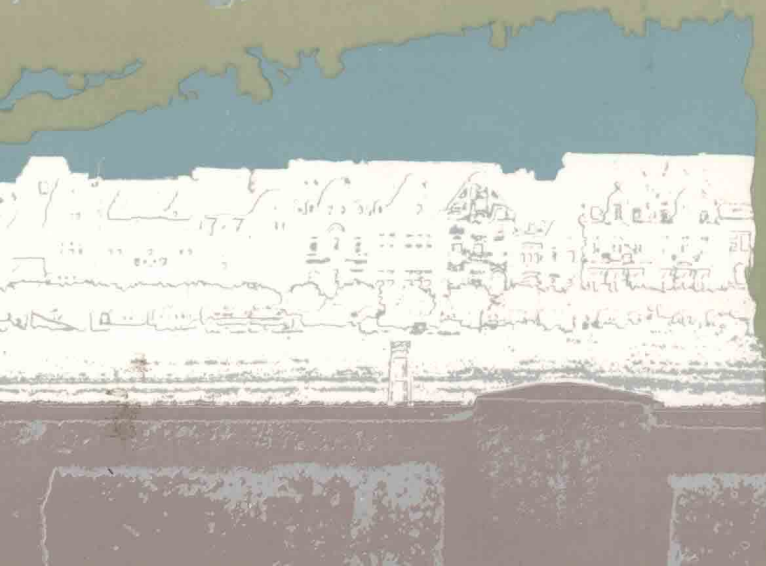


柏原兵三
ベルリン漂泊



柏原兵三
ベルリン漂泊

文藝春秋

ベルリン漂泊

昭和四十七年四月五日 第一刷

著者 柏原兵三

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

(一〇二)東京都千代田区紀尾井町三
(〇三)二六五一二二二

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

定価 六五〇円

0093-302340-7384

万一、落丁・乱丁の場合は、お取替え致します。

ベルリン 漂泊

表紙カバー写真
アート・ディレクター
栗屋 充

秋山庄太郎

バッハマン夫人の何回目か不明の誕生日に招待された翌日の三月二日、正確に言えば一九六四年の三月二日の月曜日を期して、私は部屋探しを開始した。短期即決主義で行くつもりで、大学の冬学期が終るのを待っていたのである。

イーネ・シュトラーセに面している古い建物の玄関に入って左側の最初の小部屋が、ベルリン自由大学の下宿幹旋所だった。開所時間の九時より二十分も前に、私はその部屋の前に着いてしまった。ノックをしても返事がないし、把手を廻して開けようとしても開かない。

「少し張り切り過ぎてしまったかな」と独り言を呟きながら、私は廊下に置いてあるベンチに腰をおろした。

すると二、三分も経たないうちに学生らしい長身の男が現われ、また私と同じように、ノックをし、返事がないと、ドアを開けようとした。

「まだ閉まっているようですよ」と私は声をかけた。

彼は肩をすくめてみせた。

私の隣りに坐ると、彼は私に時刻を訊ねた。

「九時十五分前です」

「Thank you」と彼は英語で答えた。

「アメリカ人ですか」と私はドイツ語で訊ねた。

「そう、アメリカのミシガンから来ました」彼もドイツ語で答えた。

「ベルリンはもう長いのですか」

「半年になります」

「それじゃあ、僕と同じだ」

「そうですか。あなたも部屋捜しですか」彼は親しみを急に覚えたらしく、親愛感のこもった声でそう訊ねた。

「そうです。あなたも？」と私は聞いた。

「ええ、今の下宿が爆音で喧いので、変ることにしたのです。とても親切なおばあさんが世話をしてくれるので、それ以外は問題はないのですが」

「いくらですか、その下宿は」

「八十五マルクで、暖房費が十マルクです」

「安いですね」

「朝食つきだからとても安いですよ」

「朝食つきですか」と私は驚いていった。

私はバツハマン夫人に部屋代として百十マルクのほか、暖房費を十マルク前後、洗濯代を月平均二十五マルク位払っていたのだから。

「もっともセントラル・ヒーティングではないので、ちょっと寒いこともありましたが、暖房の世話にはみんなおばあさんがしてくれましたからね。その点は楽です」

「どの位の大きさですか、その部屋は」

「大分大きいですよ。幅が十五フィート、奥行が十八フィート位です」

十五畳位の部屋だな、と考えていると、急にバツハマン家の狭苦しい部屋に閉じ込められるように過してきたこれまでの冬の時間が怨めしく思えて来た。

「あなたは どうして下宿を 変えるのですか」

「妻子を呼び寄せるためです」

「そうですか」と彼はいうと、ふと思いついたように、「ところで今あなたの住んでいる下宿はどんなですか」と聞いた。

私はバツハマン家の私の部屋のあらましを説明した。クアフルステンダムから歩いて十分位のところで、部屋の設備は全部整っているが、少し狭過ぎる感じのすること、台所は使用できるが、家主の老夫人が口喧い人で時々たまらなくなること、浴室は使えるが、お湯は出ないので、台所で沸かしたお湯で身体を拭くしかできないことなどを彼の質問に答える形で話したのである。

最後に彼は家賃を聞き、「わたしには少し高過ぎるようです」と首をすくめた。

足音が聞こえて来た。姿を現わしたのは古い茶色の手提カバンを持ち、らくだ色のオーヴァーを着たせむしの顔色の悪い男だった。彼は下宿軒旋所の部屋の前で立止まり、がちがちいわせながらカバンから鍵束を取り出し、ドアの鍵を開けると私たちの方を見て、

「一分後にどうぞ」といった。

時計を見ると八時五十九分であった。

九時丁度にアメリカ人と私は立ち上った。

机が窓際に置かれ、その向うにさっきの男が坐っている。左側の壁に大きなベルリンの地図が懸っている。地図を調度品ということができれば、男の坐っている机と椅子のほかには調度品は地図しかなかった。

「まず学生証を見せて欲しい」と男はいった。

私が学生証を見せると、彼は机の抽出から紙きれを取り出し、それに私の名前と学生証の番号を書き込み、サインをして、

「保証金として五マルク欲しい」といった。

私が五マルク渡すと、その紙きれをくれた。それから彼は、

「ここに現在申込みが来ているカードがある。その中から適当なのを捜して、自分で見に行つて欲しい。もし契約が成立したら、すぐに電話か出頭してその旨報告して欲しい。そうでないと、それを知

らずに見に行く学生が出るから、君たちの学友たち^{コミリトリーネ}に迷惑をかけることになる。保証金はここへ来る必要がなくなった時に、そのカードと引替えにお返しする」といった。

カード・ボックスの中に収められてある申込みのあった貸間の要件を記入したカードは、幾人かが見られるように五組位に分けられ、カードの上部に開けられた穴にリングが通されてある。

私はその一組をカード・ボックスの中から取り出してみた。

一組といっても七、八枚しかない。

どれもこれも不向きだった。つまり私は二室続きというのがあるのを期待していたのだが、その中にはそんなのは一枚もなかったのである。しかもむずかしい条件つきのものばかりだった。たとえば、喫煙をしない静かな女子学生に限る、とか、台所の使用不可能とか、ウィークエンド以外は日中大学にいる実験科学の学生に限る、とか、異性の客を連れ込むことは固くお断り、とかいった類いのものばかりである。

残りも同じようなものだった。それでもアメリカ人は二つの住所を書き写した。

「成功を祈るよ」といって彼は私の肩を叩き、出て行ってしまった。

私はこの下宿軒旋所の主らしいせむしの男に相談してみる気になった。

「実は僕は妻子を呼び寄せようと思って、部屋を捜しているのですが、むずかしいでしょうか」と私はいった。

「子供さんはいく人」

「一人です」

「いくつだね」

「この三月で一歳になります」

「ふうん」と男はいつてちょっと首をかしげてみたが、「まあ、毎日顔を出してみることもだな。駄目だと最初から諦めてかかることはない」といった。

「むずかしいことはむずかしいんでしょうね」

「いや、そうでもないさ」と彼はこともなげな調子でいった。「時々、夫婦者を希望する、なんていうのも来るからね。そんなので、赤ん坊が一人いてもいいなんていうのがあるかも知れない」

私はちょっと安心した。

「ここにある分にはなかったかな」

「いいえ、ありませんでした」

「そうかな」と男はいつて、カードを一枚一枚自分で確かめにかかった。

三番目の組に、彼は「二つのベッドつき一部屋、女子学生二人を希望」という見出しの入ったカードを見つけ出した。

「これなんか行ってみる値打がある。女子学生二人というのは、夫婦者でもいいということもあるからね。大学生で妻帯者がいることを知らない御老人もいるのだ」

「そうですね」

私は早速そのカードの住所氏名と電話番号を前の日にそのために買った表紙の厚い小さなノートに書き写した。

「二部屋続きの貸間なんていうのは出ませんか」と私は男に聞いてみた。

「出ないこともない。たまにそんなのが出るよ。根気よく立寄ってみることだね」男は再び淡々とした調子で答えた。男は不愛想だったが、しかし決して不親切ではないようだった。

「ではまた」といつて私がその部屋を出ようとするのと、

「A S t A (学生会) にはもう寄ってみたかね」と男はいった。

「いいえ、まだです」

「ちょっと寄ってみたらいい、A S t A にも同じような仕組の相談所があるから」

そういつて男は行き方を教えてくれた。

「有難うございました。それじゃあ行ってみます」と私はいつてその部屋を出た。

キャンパスのまわりの建物は、大抵ベルリン自由大学が買収していつて、大学関係の建物になっていた。小さな研究室にあてられていつたり、事務局の一部の課がそういつた民家の一つにあつたりした。私はイーネ・シュトラッセと交叉していつるゲリー・シュトラッセの端近い右側のそういつた建物にA S t Aの本部を見出した。

標札を見なければ普通の民家と思われける建物の玄関の扉を開くと、中はさすがにさまざまな広告が、およそ貼ることのできる平面のほとんどすべてを覆いつくしていつた。旅行の広告が圧倒的に多い。プ

ラハ一週間九十八マルクとか、アテネで春休みを二百七十五マルクとかいった類いの広告である。

私は方向指示板に従って下宿斡旋所にあてられている部屋に入った。

頬、鼻の下、あごを埋めつくすひげを生やした男は私の話を聞き終ると、すぐに奥からカード・ボックスを取り出して来てくれた。しかし、そのカード・ボックスの中にはたった五枚しかカードが入っていなかった。しかもそのうち四枚はもう契約が済んだのか、マジック・インクで×点が入れられている。

だが残ったたった一枚はすばらしく条件がよかった。読んでいて、思わず、しめた、これは運がいい、と心の中で快哉を叫んだ程である。それはこういう内容のカードだった。ツエーレンドルフ・ガルトン・シュトラッセ十七番地、ダブル・ベッドつき寝室、子供部屋一室、居間、浴室、台所、電話つき。夫婦者に限る、家賃二百マルク、但し暖房費、電気代は別。

ツエーレンドルフという区は住宅地としては一級地だった。大学にも非常に近い。私は家賃として最大限二百マルクを見積っていたから、その点でもこちらの条件に合致していた。本当をいうとその二百マルクの中に暖房費も電気代もふくめたいところだったが、しかしその位なら、日々の生活を節約すれば何とかなるだろうと思われた。私はまったく計算に弱いので、二百マルクと二百五十マルクでは、その五十マルクの差はほとんど問題にならないように思えてしまう方である。最上限二百五十マルク位は何とかなるだろう、と私はその時も頭の中で寛大な譲歩をした。住居費に二百五十マルク

をかけても、あと生活費に三百五十マルクは廻せる……

私はD A A D（ドイツ大学交換奉仕会）の留学生として、月に五百マルクの給費奨学金を受けていた。妻を呼び寄せると子供の分は出ないが、妻の生活費の補助として百マルクの増額が認められることになっていた。結婚証明書と、妻のベルリン居住証明書の二通をD A A Dに送付すれば、その月から六百マルクの奨学金が支給されることは、すでにD A A Dの本部に問い合わせの手紙を出し確認済みであった。

私は東京近県の国立大学の講師をしていて、留学中も、俸給とボーナスは出ていたが、それは帰りの妻子の飛行機代にあてることになっていたから、それをあてにすることはできなかった。従ってベルリンにいる間私は六百マルクの範囲内で生活をしなければならなかったが、私より一年先に留学し、半年後に家族を呼び寄せたマールブルクの友人山西の話では、余程切り詰めた生活をしなければニッチもサッチも行かなくなるといったことから、住宅費はできるだけ低く抑える必要があった。山西は百二十マルクの家賃を払い、暖房費に六十マルク、従って月に百八十マルクで住居費を抑えてなおかつ苦しいといていた。私が住宅費を二百マルク以内に抑えようと思ったのも、彼の意見を参考にしてのことだったが、今すでに私はまた五十マルクも譲歩してしまっていた……

しかし私は最後の付記事項を見てがっかりしてしまった。こんなことが書かれてあったのである。「但し持主の旅行期間四月より九月までの半年に限る」

「これはね、もう半分決ったようなものでね」とひげを顔の半分生やした青年は、私が見ていた

カードをとって別によけてしまった。

何だ、と私は思った。

「じゃあ今はないですね」

ひげの青年はうなずいた。「二、三日したらまた来たらいい」と彼はいった。「今日は月曜日だから、これは先週の残りカスみたいなものでね」

「三、四月というのは、かなり移動はあるのでしょうか」と私はすでに聞いてあったことを確かめるようにいった。

「そりゃあ、あるけれど、いいのは大体知り合いから知り合いへと直接にゆずり渡される傾向にあるからね、なかなかいいのを見つけ出すのはむずかしい。あなたは結婚しているといっていたけれども、子供さんは」

「一人いる」

青年は首をかしげた。「そいつはむずかしいなあ。子供のいる夫婦者というのは一番条件が悪いんですよ。家具のつかない部屋なら別だけれどね」

「じゃあ、また来ます」

そういつて私は外へ出た。相変らず薄どんよりと曇った陰鬱な空が私の頭上にはあった。

私は道路の角にある電話ボックスに入って今大学の下宿幹旋所で書き写して来た電話番号を頼りに電話をかけてみた。

電話口に出て来たのはかなりの年輩らしい女性の声だった。

私は簡単な自己紹介をし、夫婦者だけれども、その部屋を見せてもらうわけには行かないだろうか、といった。

「夫婦者でも構いませんが、子供はいないでしょうね」とその女性の声が訊ねた。

「実は一歳の子供がいるのですが、男の子が」一瞬躊躇したのち私は答えた。

「それでは問題になりません。前に子供の一人いる夫婦に貸したことがあるのですが、その子供に夜泣きをされて、私自身が不眠症に罹ってしまった苦い経験があるのです。だから残念ながら、この話はお断りです」

「僕の子供は夜泣きはしないと思いますが」と私は知りもしないのに妙に確信を籠めていった。

「残念だけれども、子供がいては駄目です。本当に残念だけれども」

「そうですか。では仕方がありません。さようなら」

「さようなら」

今の女性の声はとても感じがよかったけれど、あれで前の経験がなかったら貸してくれたかも知れないのに、と私は独り言を呟きながら、雪の残っている道を歩いていた。独り言をいう癖が再び始まっていた。一月ばかり日本人と話し合う機会がなかったせいかも知れなかった。たまに大学の食堂で顔を合せると喋り合った同じD A A Dの留学生の田淵氏は、大学が休みに入る一週間前からイタリア旅行に出かけてしまったから当分会えない筈だった。できることなら私も太陽と青い空のあるイタリ

アへ旅立ちたいところだった。最初の冬に過ぎなかったが、ベルリンの陰鬱な冬を経験して、私にはドイツ人が南に憧れる気持が分り過ぎる程分るような気がしていた。

ふと私は次の週のデア・ターゲスシュピーゲルの日曜版に求住居の広告を載せる予定でいたことを思い出した。すでに十二月に日本に帰ってしまった知人の桐本という医師から、新聞広告を二度出して、二度目にいい家を見つけた日本人の音楽家夫妻の話を聞かされていたのである。

それによると、住居に関する広告はその関係の特集広告のある日曜版に出すのが一番効果的なこと、ベルリンの新聞の住宅広告にはデア・ターゲスシュピーゲルと、ベルリーナー・モルゲン・ポストの二紙のそれがいいが、デア・ターゲスシュピーゲルの方が読者にインテリ層が多いから、インテリ層の家に住みたければ、デア・ターゲスシュピーゲル一紙でもよい、もちろん一番いいのは二紙に出すことだ、但しベルリンの新聞は広告代が高いから、いくら文章を短くしても、三、四十マルクは取られるだろう、というのだった。

三、四十マルクは痛かった。地方の小さな大学町のローカル新聞だと、一回分の広告料金は五、六マルクであるがと聞いていたから、尚更そう思えた。だからできれば私は広告など出さなくて部屋を捜しあてたいと思い、まず最初に大学の下宿斡旋所を訪ねてみたのである。しかし結果は思わしくなかったのだ。

仕方がない、ともかく新聞広告を出してみよう、と私は思い、文章を練るために、図書館の地階にある喫茶室へ行ってみることにした。そこでならチップなしの三十プフェニヒで珈琲が飲めるのだっ